

現代青年の社会的モデルに関する基礎研究

——生き方態度に及ぼす社会的モデルの影響力と性差についての検討——

A Basic Study of Social Models for Adolescents

The Examination of the Effect of Social Models on the Attitude for Life and its Sex Differences

西村昭徳 持木信春 大野千枝 酒井さつき
(東京成徳大学大学院心理学研究科)

杉原一昭
(東京成徳大学)

新井邦二郎
(筑波大学)

Akinori NISHIMURA Nobuharu MOCHIKI Chie OHNO Satsuki SAKAI
(Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

Kazuaki SUGIHARA (Tokyo Seitoku University)

Kunijirou ARAI (Tsukuba University)

要 約

本研究の目的は、社会的モデルが青年の生き方態度に及ぼす影響力についてのモデルによる差及び、性差を検討することである。大学生 269 名を対象として調査が行われた。社会的モデルとして6つのモデル(有名人、きょうだい、友人、教師、父親、母親)が設定された。調査用紙は、モデルごとに作成されており、6種類の調査用紙が準備された。調査は、被験者間計画で行われた。結果は、次の通りである。(1) きょうだい、友人、母親といった身近な人物が、メディアを通じて間接的に接触する有名人よりも強い影響力をもつことが示された。(2) 主体的に生きる態度、防衛的な態度の2領域において、女性の方が男性よりもモデルからの影響を受けやすいことが示された。(3) 女性は、目標をもって頑張ろうとする態度についてのモデルをメディアを通して見つけることが困難であることが示された。

キーワード: 社会的モデル、生き方態度、重要な他者、親密性

問題

自己の形成や自律性を確立する時期である青年期において、モデル(お手本あるいは、模範、模倣の対象)として機能する他者の存在は、大変重要であると考えられる。携帯電話や電子メールの普及といったマスメディアの発展により

現代青年の多くは、モデルとする人物に対して自ら接触することができる環境にあるといえる。しかしながら、人間関係の中に生きていく上での有効なモデルを見出せないでいる者が多く(深谷, 1997)、モデルの不在が青年期における発達上の問題に影響を与えていることが考えられる。

人が新しい認知と行動の様式を獲得する過程において観察する対象を、社会的学習理論 (social learning theory) では、社会的モデル (social model) と表現している。社会的な経験と社会的な要因によって認知と行動の新しい様式が形成されるという社会的学習理論を背景としたこれまでの研究では、モデルの行動が観察者に採用される程度は、観察者とモデルとの関係やモデルの性質に左右されることが指摘されている。例えば、Bandura & Walters (1963) は、偉いと思われるモデル、高い社会的地位にあるとみなされるモデルの行動は採用されやすいことを報告している。また、異性よりも同性のモデルの行動が採用されやすく、年齢や地位が自分に似ていると思うモデルの行動も採用されやすいと指摘している。

また、社会的モデルと類似する概念として、アイデンティティ研究において個人の自己形成に重大な影響力をもつ大切な人物として扱われてきた、重要な他者 (significant others) という概念をあげることができる。Darling, Hamilton, & Niego (1994) は、これまでの重要な他者についての研究から、青年期にとっての重要な他者の機能を感情的要素と道具的要素に分類している。感情的要素とは、信頼や安心などの感情的

なサポートとして機能するものである。従来の研究において扱われてきた重要な他者の多くは、愛着を基盤とした対人関係が中心であり、感情的要素に焦点が当てられてきたといえよう。一方、道具的要素とは、特定の役割や目的に関しての道具的助けとして機能すると考えられている。このように、重要な他者の2つの機能を考慮すると、社会的モデルは道具的要素に類似する機能をもつと考えられる。

西村・持木・大野・酒井 (2001) は、高校生100名を対象として社会的モデルについての探索的研究を行ない、現代青年が自分の行動や思考・態度に影響を与えていると認知する社会的モデルを明らかにしている (Table 1)。また、高校生と大学生を対象とした調査を行い、因子分析の結果、社会的モデルの影響領域として6つの領域を確認している。本研究では、社会的モデルが現代青年に及ぼす影響力の性差に焦点を当てる。これまでに、青年期の対人関係様式の性差については、様々な研究で明らかにされてきた。多くの研究は、女性の方が男性に比べて親密性を重視する (例えば、Buhrmester, 1996 ; Maccoby, 1990 ; 落合・佐藤, 1996) ことを指摘しており、このような対人関係の性差は、社会的モデルに対する認知や接触の仕方に影響を与えていると考えられる。

そこで、本研究では、社会的モデルとして、親密な関係を築きやすいと考えられる身近な人物 (きょうだい、友人、教師、父親、母親) とメディアを通じて間接的に接触する人物 (有名人) をとりあげる。この6つの社会的モデルにおいて、モデルによる影響力の違いと、モデルから受ける影響力の性差について検討することを本研究の目的とする。尚、本研究では、社会的モデルの影響領域として、ある程度の性差が予想される生き方態度に関連する「防衛的態度」、

Table1 選択された社会的モデルの内訳

モデルのジャンル	選択数
家族	71
友だち	57
教師	18
知人	31
恋人	5
タレント(芸能人)	40
スポーツ選手	4
作家	4
空想上の人物	6
歴史上の人物	3

(複数回答)

「主体的態度」、「忍耐努力」の3つの領域を扱う。高井(1999)は、対人関係性の視点から、青年期以降の生き方態度の発達の変化を検討し、性差を確認している。また、平成9年に総理府広報室が行なった調査でも、「生き方について影響を受けた人物」についての回答結果に男女でばらつきがみられる。これらの先行研究からも、生き方態度についてのモデルへの接触の仕方とモデルからの影響には性差があると予想される。

近年、自分の生き方に迷い、自我同一性の拡散状態にある青年が増加しているという報告もある(石谷, 1994)。現代青年が、生き方態度についてのモデルをどのように認知しているか、また、有効なモデルとその影響力について性差を踏まえて検討することで、青年期における臨床的な対応の上でも有益な知見を得ることが出来ると考えられる。

方法

(1)被調査者

都内の大学(国立大学1校、私立大学1校)において1年生対象の授業を受講する学生269名(男性101名、女性168名)を調査対象とした。(調査期間は、2001年1～2月。)

(2)調査尺度

社会的モデルの影響レパートリー(西村・持木・大野・酒井, 2001)の38項目のうち、生き方態度に関する3つの領域(主体的態度、防衛的態度、忍耐努力)の28項目が用いられた。尚、これらの項目は、例えば、「自分の考えをはっきりともつことが(できる・できない)」といった質問になっている。まず、最初に()内の当てはまる方に○をすることが求められてお

り、その後で、設定されている社会的モデルがその内容に対してどの程度影響を及ぼしているかを「ぜんぜんない」から「とてもある」までの4件法で回答する形式となっている。すなわち、()内のどちらに当てはまるかは問題ではなく、例のように「自分の考えをもつことができるかどうか」ということについて、モデルとしての影響力がどの程度あるのかを測定することがねらいであった。

(3)手続き

6つのモデル(父親、母親、きょうだい、友人、教師、有名人)が設定され、6種類の調査用紙が準備された。1つの調査用紙につき、いずれか1つのモデルが与えられており、被調査者には、与えられたモデルを想定して回答するように求めた。(尚、ここでいう有名人とは、メディアを通して間接的に接触する人物であり、スポーツ選手やミュージシャンといったあらゆるジャンルの人物を含んでいる。)調査は、授業中に一斉に行なわれた。

結果

(1)影響領域得点の算出

本研究で分析の対象としたのは、生き方態度に関連する「主体的態度」、「防衛的態度」、「忍耐努力」の3つの領域である。まず、各項目度との平均値とSD(標準偏差)が算出された。各項目得点の記述統計量はTable2に示されている。平均値±SDの値と各項目得点の得点範囲を比較し、得点に偏りのみられた13項目が削除された。次に、各領域の合計得点と各項目得点のI-T相関を算出した結果、主体的態度領域で.61～.79、防衛的態度領域において.45～.61、忍耐努力領域においては.62～.68という値が示

Table2 分析対象となった社会的モデルの影響レバートリーの項目

項目	平均	SD	I-T 相関
「主体的態度」			
1.自分の意見を主張（できる・できない）。	2.18	.98	.74
2.おらかなこころもって（いる・いない）。	2.05	1.03	.63
3.他人に親切で（ある・ない）。	2.24	1.08	.77
4.誠実に生きて（いる・いない）。	2.08	1.01	.61
5.ものごとを冷静に（みる・みない）。	1.98	.96	.79
6.他人を思いやって行動して（いる・いない）。	2.25	1.07	.74
7.相手の身になって考えることが（できる・できない）	2.20	1.04	.75
「防衛的態度」			
1.友達を大切に（いる・いない）。	2.34	1.14	.61
2.金持ちになりたいと（思う・思わない）。	2.11	1.08	.55
3.他人の悪口を言って楽しむことが（ある・ない）。	1.87	.95	.45
4.今が楽しければそれでいいと（思う・思わない）。	2.04	.99	.61
「忍耐努力」			
1.努力することを（惜しむ・惜しまない）。	2.01	.97	.68
2.ものごとを最後まで（やり抜く・やり抜かない）。	2.08	1.00	.62
3.チャレンジ精神をもって（いる・いない）。	2.03	.98	.65
4.目標をもって生きて（いる・いない）。	2.15	1.05	.68

Table3 分析対象となった社会的モデル影響領域の記述統計量

領域名	最小値	最大値	平均	SD	α 係数
主体的態度 (N=250、7 項目)	1.00	4.00	2.14	.82	.91
防衛的態度 (N=259、4 項目)	1.00	3.75	2.09	.79	.76
忍耐努力 (N=259、4 項目)	1.00	4.00	2.07	.81	.83

された。さらに、領域ごとに Cronbach の α 係数を求めた結果、主体的態度領域で.91、防衛的態度領域で.76、忍耐努力領域で.83 という値が示された。この結果、各領域においてある程度の内部一貫性が確認された。しかしながら、各領域の合計得点をそのまま各領域得点とすると、項目数に違いがあるため領域得点の得点範囲に差が生じてしまう。そこで、各領域得点の合計を項目数で割った値を各領域得点とした。各領域得点の記述統計量については Table3 に示されている。

(2) 各モデルの影響力及び性差の検討

3つの影響領域得点を従属変数として、性別(2)×モデル(6)の二要因分散分析(被験者間計画)が行われた(Table4)。

①主体的態度領域

この領域において有効回答者は、有名人(男性20名、女性28名)、きょうだい(男性18名、女性19名)、友人(男性17名、女性30名)、教師(男性15名、女性29名)、母親(男性10名、女性29名)、父親(男性15名、女性19名)であった。分析の結果、性別の主効果($F(1, 237) = 9.41, p < .01$)が

Table4 モデル×性別の分散分析結果

	有名人		きょうだい		友人		教師		母親		父親		F 値		
	男性 n=22	女性 n=30	男性 n=20	女性 n=23	男性 n=17	女性 n=32	男性 n=16	女性 n=34	男性 n=10	女性 n=29	男性 n=16	女性 n=20	モデル	性差	交互作用
防衛的態度	1.85 (.63)	1.79 (.77)	1.91 (.95)	2.30 (.86)	2.04 (.90)	2.55 (.64)	1.38 (.48)	1.86 (.69)	2.36 (.60)	2.55 (.73)	2.09 (.45)	2.24 (.83)	6.78***	8.13**	1.03
主体的態度	1.60 (.71)	1.61 (.63)	2.02 (.97)	2.39 (.78)	1.91 (.90)	2.59 (.57)	1.60 (.79)	2.12 (.71)	2.51 (.56)	2.62 (.69)	2.23 (.85)	2.37 (.79)	8.32***	9.41**	1.32
忍耐努力	1.94 (.88)	1.66 (.72)	1.68 (.72)	2.34 (.94)	1.94 (.78)	2.51 (.77)	1.71 (.85)	2.03 (.70)	2.25 (.53)	2.39 (.70)	2.05 (.77)	2.13 (.89)	2.59*	5.78*	2.21*

* $p < .05$ **, $p < .01$, *** $p < .001$
()は、標準偏差

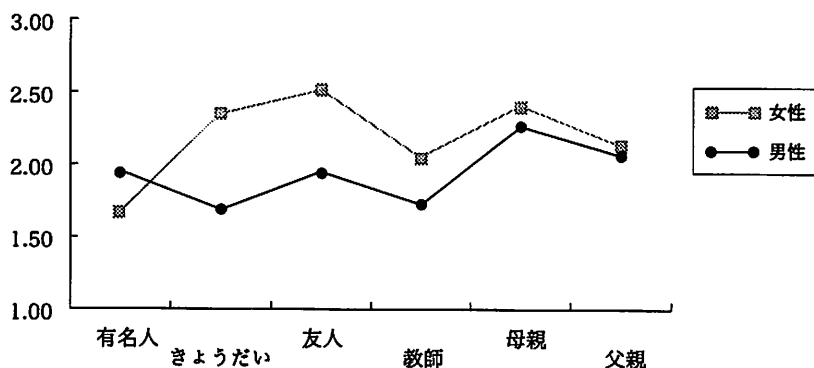


Figure1 忍耐努力得点のモデル間比較

みられ、女性の方が有意に高い平均値を示した。さらに、モデルの主効果 ($F(5, 237) = 8.32, p < .001$) が確認された。Tukey-HSD 法による多重比較の結果、きょうだい、友人、母親、父親が有名名人よりも高い平均値を示し、母親が教師よりも高い平均値を示した ($MSe = 0.55, p < .05$)。

②防衛的態度領域

この領域において有効回答者は、有名名人 (男性 22 名、女性 29 名)、きょうだい (男性 19 名、女性 21 名)、友人 (男性 17 名、女性 31 名)、教師 (男性 16 名、女性 33 名)、母親 (男性 9 名、女性 28 名)、父親 (男性 14 名、女性 20 名) であった。分析の結果、主体的態度領域と同様に、性別

($F(1, 247) = 8.13, p < .01$) とモデル ($F(5, 247) = 6.78, p < .001$) の主効果がみられた。Tukey-HSD 検定の結果、友人と母親が、有名名人よりも高い平均値を示し、友人、母親、父親が教師よりも高い平均値を示した ($MSe = 0.54, p < .05$)。

③忍耐努力領域

この領域での有効回答者は、有名名人 (男性 22 名、女性 28 名)、きょうだい (男性 20 名、女性 20 名)、友人 (男性 17 名、女性 32 名)、教師 (男性 14 名、女性 32 名)、母親 (男性 10 名、女性 28 名)、父親 (男性 15 名、女性 20 名) であった。分析の結果、性別 ($F(1, 246) = 5.78, MSe = 0.61, p < .05$) とモデル ($F(5, 246) = 2.59, MSe = 0.61, p < .05$) の主効果

及び、交互作用効果 ($F(5, 246) = 2.21, MSe = 0.61, p < .05$) が確認された。モデル間での領域得点(平均値)の変動を Figure1 に示す。有意な交互作用がみられたので、性別、モデルのそれぞれで単純主効果の検定を行なった。性別の単純主効果検定では、きょうだいと友人において性差がみられ、女性の方が有意に高い平均値を示した(きょうだい: $F(1, 38) = 6.22, p < .05$ 、友人: $F(1, 47) = 5.92, p < .05$)。一方、モデルの単純主効果検定では、女性においてのみモデルの主効果が確認された ($F(5, 154) = 4.49, p < .001$)。多重比較(Tukey-HSD 法)の結果、きょうだい、友人、母親が有名人よりも高い平均値を示した ($MSe = 0.60, p < .05$)。

考察

1. モデルとの関係性とモデルの影響力

本研究は、被験者間計画で行なわれたものであるが、母親、友人、きょうだい、といった身近な人物で、親密な関係性を築き易い人物の方が、間接的に接触する有名人に比べ、青年期に生き方態度の各領域にモデルとして影響を与えていることが示された。これらの結果は、従来指摘されてきた、愛着関係や親密な関係から自己を捉えた研究(例えば、遠藤, 1997)の結果と一致するものであった。

一方で、メディアを通して間接的に接触する有名人も、部分的にモデルとしての影響力を示した。すなわち、男性は、「目標をもって頑張るかどうかという態度」を、友人や父親といった身近な人物と同じくらいメディアに登場する人物から影響を受けることが確認された。これは、女性は、男性と比べて、目標をもって生きるかどうか、努力するかどうかということに関連する有効なモデルをメディアを通して見つけ

ることが困難であることを示しているともいえるであろう。このような結果がみられた、一つの要因として、Buhrmester (1996) や榎本 (1999) が指摘するように、女性のほうがより親密な関係を重視するという対人関係の性差をあげることができるだろう。

また、どの領域においても、教師のモデルとしての影響力が低いことが示された。この結果は、重要な他者としての教師の重要度を調べた Galbo (1984) や Lempers & Clark-Lempers (1992) の結果とも類似するものである。教師は、挑戦者役割(自分の考えに対して疑問を投げかけたり、再度考えるよう求める役割)としてみなされている(Hendry et al., 1992)という報告もあり、本研究においても、教育者・指導者としての役割がより強く認知されていると考えられる。

2. モデルが及ぼす影響力の性差

今回扱った社会的モデルの影響領域は、生き方態度に関する3つの領域であった。忍耐努力領域で交互作用効果が示されたが、この部分的な効果を除くと、ほとんどの場合において、男性に比べ女性の方がモデルからの影響を受けていることが示された。友人関係や親子関係といった青年期の様々な人間関係の性差については、これまでも多くの研究で指摘されてきている。女性は、自己開示や親密性を重視し(Maccoby, 1990)、理解し合うことを望む(落合・佐藤, 1996)ことから、身近な他者をモデルとする可能性が高くなると考えられる。また、女性の方が、男性に比べて他者受容が強い傾向(高井, 1999)にあり、モデルから受ける影響力も、男性に比べて強くなると考えられる。

今後の課題

本研究では、社会的モデルが青年期の生き方態度に及ぼす影響をモデルとの関係性（身近な人物とメディアに登場する人物）と性差に焦点を当て検討した。しかしながら、本研究では、モデルからの影響について、正の影響であるか負の影響であるかの区別をしていないため、結果から言えることは、あくまでも影響領域についての言及に留まるものである。今後は、モデルからの影響が正であるか負であるかを吟味した上で、研究を進めて行く必要があるといえよう。

引用文献

- Bandura, A.H. & Walters, R.H. 1963 *Social Learning and Personality Development*. Holt, Reinhart & Winston.
- Buhrmester, D. 1996 Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W.M. Bukowski, A.F. Newcomb, & W.W. Hartup(Eds.), *The company They Keep : Friendship in Childhood and Adolescence*. New York : Cambridge University Press. Pp158 - 185.
- Darling, N., Hamilton, S.F. & Niego, S. 1994 Adolescents' relations with adults outside the family. In R. Montemayor, G.R. Adams & T.P. Gullotta(Eds.), *Personal relationships during adolescence*. Thousand Oaks : Sage Publications. Pp216 - 235.
- 遠藤由美 1997 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下. *心理学研究*, 68, 387 - 395.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化. *教育心理学研究*, 47, 180 - 190.
- 深谷昌志 1997 モノグラフ中学生の世界 Vol.58 : 中学生の人生観. Pp46 - 47.
- Galbo, J.J. 1984 Adolescents' perceptions of significant adults : A review of the literature. *Adolescence*, 19, 951 - 970.
- Hendry, L.B., Roberts, W., Glendinning, A. & Coleman, J.C. 1992 Adolescents' perceptions of significant individuals in their lives. *Journal of Adolescence*, 15, 255 - 270.
- 石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人的関係性. *心理学研究*, 42, 118 - 128.
- Lempers, J.D. & Clark-Lempers, D.S. 1992 Young, middle, and late adolescents' comparisons of the functional importance of five significant relationships. *Journal of Youth and Adolescence*, 21, 53 - 96.
- Maccoby, E. 1990 Gender and relationships : A developmental account. *American Psychologist*, 45, 513 - 520.
- 西村昭徳・持木信春・大野千枝・酒井さつき 2001 現代青年の社会的モデルとその影響力. *日本教育心理学会第43回総会発表論文集*, 254.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. *教育心理学研究*, 44, 55 - 65.
- 高井範子 1999 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究. *教育心理学研究*, 47, 317 - 327.
- 総理府広報室 1997 平成9年「国民生活に関する世論調査」

A basic study of social models for modern adolescents

～ The examination of the effect of social models on the attitude for life and its sex differences ～

Akinori NISHIMURA Nobuharu MOCHIKI Chie OHNO Satsuki SAKAI

(Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

Kazuaki SUGIHARA

(Tokyo Seitoku University)

Kunijirou ARAI

(Tsukuba University)

ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate differences among six models and sex differences about the effect of social models on the adolescents' attitude for life. Participants were 269 university students. Six social models were supposed on this study — popular persons among the general Japanese, brothers and sisters, friends, teachers, mothers, fathers. One questionnaire was about one model, then six kind questionnaires were used. The indications of the result were as follows.(1)Familiar persons — brothers and sisters, friends, mothers — tended to effect on the adolescents' attitude for life. (2)Sex differences were found in two areas of the attitude for life : subjectiveness and defensiveness.(3)Popular persons among the general Japanese tended to hardly effect on women's challenge.

KEYWORDS : social model, attitude for life, significant others, intimacy